
the RooM of dea † h 『**真実と嘘**』

【桃月】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the Room of death 『真実と嘘』

【Zコード】

Z9499D

【作者名】

【桃月】

【あらすじ】

閉鎖された空間に閉じ込められた5人の少年少女。少年少女が脱出するには犯人を見つけること。 この5人ノ中力らネ…… それでは問題。『この5人の中で嘘をついているのは……だーれだ?』間違えたら、一人ずつ“消えていくよ”。だから、間違えないでね? 正解は自分で考えるんだよ? それじゃあ……ゲームスタート。

【キャラクター紹介】

大城 沙流歌（おおしろ さるか）

16歳（女）

ボニー・テールの体育会系少女。関西人。
元気で前向き。動くのがとにかく好き。

白木 アキラ（しらき あきら）

18歳（男）

金髪男。不良。

乱暴だが、可愛い女には抜け目がない。

月村 優（つきむら ゆう）

17歳（男）

メガネをしている青年。

しつかりしていて、誰にでも心優しい。リーダー役。

宮野 美影（みやの みかげ）

18歳（女）

ショートカットの似合のう女性。

無口でクールな性格。人との付き合いをあまり望まない。

梨守 真夜（りかみ まや）

17歳（女）

栗色の長髪で容姿端麗。

冷静な性格。頭の回転が他の人より数段速い。

最初は「グチャツ」（前書き）

お願いします。

どうか、私に協力してください。

この閉鎖された建物で起ころる殺人ゲームを

止めてください。

私には参加する事しかできません。

あなたが真実を暴いてください。

私は“嘘”はつきません。

最初は「グチャツ」

目を覚ますと、そこは見知らぬ場所だった。

「「」は……？」

どうして、こんな場所にいるのかわからない。
思い返そうとしても、何故か思い出す事ができない。
さらに頭痛がする。
さつきから、ズキン、ズキンと痛みが増してきている。

これは一体……？

「おーい、誰かいないかー？」

「……声？」

奥の方から男の人の声が聞こえてくる。
まだ若そうな声からして、私と近い年代かもしけない。

「あ、いたいた！ 大丈夫かい？」

近づいてきた人は思つたとおり、私と近い年代の青年だった。

「え、ええ。」は一体……？」

「それが僕にもわからない。ただ、僕達はどうやらこの建物に閉じ込められたらしいんだ」

……閉じ込められた？

「それって、どういう意味なの？ 閉じ込められたって……」

「ああ。どうやら、この建物は完全に閉鎖されているんだ。調べてみたんだけど、脱出する出口がまったくなかつた」

「あの、携帯電話とかは？」

青年は頭を搔きながら、首を横に振った。
事態がまったくわからない。

なんで、こんな事になってしまったのだろう。
私は考え込みながら、辺りを見回した。

廃墟された建物。

それが一番、この場所を表す適切な言葉だった。
ドラム缶が散乱していて、ゴミがあちこちに散らばっている。
溝鼠でもいそうなくらい、辺りは散らかっていた。

唐突に青年が口を開く。

「とりあえず、他の人と合流してから。詳しく話そう

「……他の人？ 私達以外にもまだいるの？」

「ああ。僕と君を合わせて、現在5人になるね」

「そりなんだ」

「あつ、そりいえば、まだ自己紹介がまだだったよね。僕の名前は
月村優。よろしく

「私は梨守真夜。……よみぐれ」

彼から差し出された手を取り、握手する。

「月村……君でいいかな？ あなたはここに閉じ込められる前の事つて覚えてる？」

「いや、覚えていないな。梨守さんも？」

「ええ」

「……そつか。なら、もしかしたら、他の皆も同じなのかもしねないな」

「多分、そうなるわね」

月村君に案内されて、細い廊下を歩く事、数分。

私達は大きな部屋へと出た。

そこには既に他の場所を探索してきたのか、三人の少年少女が退屈そうに待っていた。

「（じめん、待つたかな？」

金髪の青年が月村君の言葉に反応して、「おせーよー」と愚痴を漏らしていた。

「……そつちの人は？」

ショートカットの髪型をした女性が私の方を見て、月村君に聞く。

「ああ。僕達と同じ、この場所に閉じ込められた人だよ。名前は……」

「梨守真夜です。よろしく」

金髪の青年が「ヒュ～！」と口笛を吹いて、私は少しばかり嫌悪感を抱いた。

「何々、なかなか可愛いじゃん！　俺、君みたいな子、すっげー好みなんだけど」

「おい、アキラ！　よせよ、梨守さんが嫌がっているって」

月村君が金髪の青年を止めに入る。

「おいおい、月村。俺はただ、好みだって言つただけじゃんか。ホント、お前真面目過ぎて、うぜーな……」

アキラと呼ばれた青年が舌打ちをして、傍に倒れていたドラム缶の上に座る。

「あはは……。ごめんね、梨守さん」

「ええ、別になんともないけど……、あの人は？」

「彼は白木アキラ。僕が最初に出会った人だよ」

白木はポケットから、タバコケースを取り出して、タバコを一本抜き取る。

そして、それに火を点けて一服していた。

「アイツ、不良だから氣をつけた方がいいで」

「……え？」

私の後ろから声がしたので、振り返つてみる。そこにはボニー・テールの髪型をした少女が白木を見ながら、立っていた。

「えーと、……あなたは？」

「ウチは大城沙流歌。よろしくな！ 真夜」

初対面でいきなり名前を呼ばれる事に少し、困つてしまつ。喋り方から見て、きっと関西の人なんだろ？。活発そうな性格の少女だった。

「ええ。よろしく、大城……さん」

「沙流歌でええよ、呼び捨ての方がこっちも氣が楽やねん。それにしても、アンタ、すごく美人さんやなあ。何食べたら、そんなに綺麗になれるん？」

沙流歌が目を輝かせながら、私を見る。

どうやら、彼女はこの現状について事態を重く感じていないうらしい。

「そ、そうね。好き嫌いがなかつたから、……かしら？」

「あひや～。そしたら、ウチじや、無理や～ー。ウチ、ピーマン食べられへんからなあ～」

沙流歌は残念そうな顔をして、肩を落とした。

そんな沙流歌を見て、私はつい笑みを溢してしまった。

「あ、笑わんといてや～。ウチ、ホンマにピーマン食べられへんのやで！ なんか、バカにされてるようで傷つくわあ～」

「「めん、「めん。そんなつもつじやないわ。ただ……、」こんな状況なのに明るいのがすごこって思えて」

沙流歌は本当にあまりにも変わった子だった。

いや、本当はこの状況の中で恐さを隠して、無理に明るく振舞つているだけなのかもしれない。

でも、そのおかげだらうか。

警戒していた私の心も、すっかりと簡単に解けていった。

そして、沙流歌との話も終えて、私は最後の一人に挨拶に行つた。

床に座つていたショートカットの髪型の女性は、やつてきた私を上目で見つめる。

その目にほどこか不思議な雰囲気を宿しているかのように私には見えた。

「初めまして。梨守真夜です。よろしく」

「……よひしへ。私は富野美影」

「あの、富野さんもここに閉じ込められる前の事とか覚えていないの？」

「……ええ」

「そ、そつなんだ。それじゃあ……」

他にも質問を聞いてみたが、返答のほとんどは「……ええ」や「……違う」など、最低限に返せる言葉だった。

どうやら、富野さんはあまり喋るのが得意ではないらしい。さすがにもつ何も話す事がなくなってきたところで、私は富野さんとの会話を終了した。

とにかくにも、どうやら、私達5人はこの閉鎖された建物内に閉じ込められたらしい。

4人の話によると、この建物内にある出口は全て閉鎖されてくる。そして、携帯電話も使用する事ができない。

要するに、脱出不可能という事になる。

それでも……何か手はあるはず。大体、私達は何故、こんな場所に連れてこられたの？

いへり考へても、まつたく答えが出ない。

いや、出るはずがない。

だつて、私達5人には“まったくの関連性がない”からだ。

だから、まったく犯人の考へてゐる事が読めない。

私達をどうするつもりなのか、それさえ予測不能なのだ。

「あー、だりい！ いつになつたら、ここから出れるんだよー。」

白木が3本目のタバコを吸い終えた所で、立ち上がり、歩き出す。

「おい、どこに行くつもりだ！ アキラ！」

月村君が白木を止めようと声を掛ける。

「便所だよ！ 便所！ つたく、勝手に人の名前を呼び捨てにしてるんじやねーつての！」

「すぐに戻つてこいよ。何があるか、わからないんだ」

「わかつてゐよ、……つたく、うぜー奴」

そう言い残して、白木はトイレを探しに行つた。

「彼……一人で行かせてよかつたの？」

本当に一人で行かせてよかつたのか、不安になつて、私はその事を月村君に聞いてみた。

「大丈夫だよ。ここには僕達5人しかいないんだし、それにアキラ
だって男だ。自分の身くらいは守れるよ」

「まあ、そうよね……」

月村君にさう言葉を掛けられるも、私の不安は消える事はなかつた。
そして、この不安はすぐに的中する事になる。

「ふう~」

よつやく、トイレを見つけることができて、俺は一息つく。

……それにしても、あの真夜ちゃんって言つたつづく

俺はあの女を思い返していた。
本当に綺麗な容姿をしていた。

「！」を出たら、まっさきに寝つけておかねえとなあー！あんな極上な女はこの先、出会えるかどうかわかったもんじやないぜ

俺は小便を済ませて、洗面所の前へと立つ。

まあ、早く！」を抜け出して、あの子と一人きりで……。

「ンッ！　ンッ！

「ん？　誰だ？」

奥の扉から、ノックが聞こえて、俺はそつちを振り返つて見た。

「ンッ！　ンッ！

「おい！　他に誰かいるのか？」

つたぐ、悪ふざけも大概にしやがれよ！

俺は手を洗い終えると、ノックが聞こえてきた扉へと近づく。
一番奥から、一つ手前の扉だ。

俺はドアをノックした。

「コンッ！ コンッ！」

「誰か入っているんだつたら、ノックしない。」

数秒も立たずして、ノックが帰つてくる。

「コンッ！ コンッ！」

やつぱり、誰かいるのか。ちつ、月村のヤロウ。5人だけじゃなかつたじやねえーかよ。

「はあ～、アホらしい。早く戻るか」

俺はその扉から離れよつと歩き始めた。

「キイイイン！」

後ろで扉の開いた音が聞こえた。

どうやら、中に入つていた奴が大便を終えたらしい。

そう言えば、どんな奴か気になる。

俺は振り返ろうと、言葉を掛けた。

「おー、お前も閉じ込められ

」

グチャツ！

「……あ？」

腹辺りに何か冷たい感触が入り込んでくる。
それが何度も何度も出入りしていた。

グチャツ！ グチャツ！

「……げうえ」

入り込んできた冷たい感触の辺りから、赤い液体がポタポタと流れるのが見える。

「これは……俺の……血……？」

よく見てみると、せつきから出入りしていたのは細い15センチ程の銀色のナイフだった。

今ではすっかり、俺の血がベトベトについて、真っ赤な紅色に染め上がっている。

グチャツ！ グチャツ！

ナイフを握り締めているのは“ ” だった。

実際に楽しそうにナイフを振りかざしては刺しての繰り返しをしている。

その刺し方と来たら、腹の中をかき混ぜているみたいだった。

既に腹の中の臓器が無茶苦茶に溢れかえっていた。

中には、刺さったナイフに引き抜かれて、出てきている臓器もあつた。

ピンク色に染まっている臓器本体に俺の血が、べつとつとついてあ

る。

まるで、スポンジのケーキにクリームを塗った後のような感じだった。

「てめつ、やめつれ、ぐええげ、ぶええつう……」

血が、俺の血がゅつくつと床を伝つていく。
ドロドロと流れていく血はそのまま排水溝へと流れ、ピチャピチャと音を立てて流れ落ちていく。

「ぎえつ、ぐつ、う……」

もう、まともな声が出せないでいた。
あまりに激痛故に意識がすぐにでもぶつ飛びそうだ。
視界もだんだんとだが、ぼやけてきている。
それでも、そんな俺を見て喜びながら、" " はナイフを振り下ろすのを止めない。

" " が口を開けて、俺に話しかける。

「お前……は最……生贅……つてもり……よ

もう句を言つてゐるのか、はつきりと聞こえない。

「あ…………え…………」

ただ手を、手を上へとひたすら伸ばす。
そして、神に縛る様に、俺はがむしゃらに慈悲を願つた。

……死ニタクナイ、死ニタクナイ！

「さよなら。白木アキラ」

“…………”の口が確かにそう言つてゐるよつて俺には見えた。

ナイフが俺の喉元に勢いよく振り下ろされる。
トドメを刺さんとばかりに血を求めているかのようて真つ直ぐに喉元へとナイフが下りてくる。

「ぐ…………お…………」

……死ニタクナイ、死ニタクナイ！ 僕ハマダ、死ニタク
！！

グチャツ！

……遅い。遅すぎる。

僕は腕時計を見ながら、時間を確認する。

アキラがトイレに行ってから、既に一時間が経過していた。

「月村君。……彼、中々戻ってこないわね」

梨守さんが深刻な顔つきで囁つ。

確かに、トイレだけでここまで時間がかかるのはおかしい。

「……僕、ひょっと探しに行つてくる」

「わかったわ。一応、気をつけたね。何があるかわからないわ」

「ありがとう」

僕は梨守さん達を残して、アキラが進んだ方向へと向かった。

薄暗い廊下が続いており、僕はゆっくりと歩いていく。

明かりは着いているのだが、電灯が切れているのか、チカチカと点いたり消えたりしている。

嫌な雰囲気が漂っていた。

こんな状況じゃなきや、絶対にこのよつたな場所を一人で歩きたくないものだ。

ホラー映画で見る最初のシーンのようで、ビック不気味に感じてしまつ。

「アキラー！　おーい、返事しろー！」

大声で叫ぶが、返答はなく、僕の声が暗い廊下の中に響くだけだった。

廊下の一番奥にトイレがあり、僕は少し急いで歩いて向かった。

トイレに入ると、電気が消されていて真っ暗だつた。

僕は電気のスイッチを探す。

あ、あつた！　これか。

力チツ！

「ツーー！」

明かりが点いて、視界が回復していく。

いきなり、眩しい光が辺りを照らし出す。

さつきまで、薄暗い景色ばかりを見ていたので、反射的に目を瞑ってしまった。

初めのうちは、眩しかつたものの、それがだんだんと慣れていき、僕は目を開け始めた。

“それは見るべき光景ではなかつた”。

想像もしていなかつたありえないモノが僕の瞳に映り、僕は啞然と口を開けてしまう。

同時にさつきまで、正常だつた思考が一気に破裂するような勢いで混乱に陥る。

「うわああああああああああああああーッー！」

僕は無意識に絶叫していた。

いや、叫ばずにはいられない光景だつたのだ。

そこには全身血まみれになつて、床に倒れていたアキラの姿があつた。

その姿からは既に生気が感じられず、ほんの僅かな動きさえしない。

し、死んでいる！？

顔には苦痛と恐怖に満ち溢れていた。

白い地面はアキラの体から今も出てきている血で真つ赤に塗られている。

あまりにもグロテスクな光景を見てしまい、僕は猛烈な吐き気に襲われた。

「ぐうええええ……っ！」

勢いよく、地面に向かつて、ゲロを吐いてしまう。

そのゲロが血と混ざり合い、なんとも気持ちの悪い液体が完成してしまつ。

な、なんだ、これ……。こんな……こんな事つて……。

「月村君！ 大丈夫！？」

梨守さんの声が聞こえてくる。

きつと、さつきの僕の叫び声を聞いて、駆けつけてきたのだろう。足音が3人分、トイレにこっちに向かってきた。

「どうしてこんなやつたんや?」

沙流歌ちゃんが心配そうな声を出して、一番にトイレに入らうとする。

「だ、だめだ！ は、入つてきちゃ……！」

僕は沙流歌ちゃんを止めようと声を掛けたが、遅かった。

くと回けていく。

に歪まされた表情へと変化していった。

認できない。

沙流歌ちゃんの悲鳴がトイレに響き渡る。

その悲鳴に誘われて、梨守さん、富野さんがトイレに入つてくる。

「これは……！」

梨守さんはアキラの悲惨な姿を見て、口を押さえて驚愕していた。梨守さんの後ろにいた富野さんも声は出していなかつたが、目を大きく開いて驚いている。

僕は吐き気を抑えて、アキラの体を調べてみた。

間近で見ると、さらに酷い光景だつた。

腹部を何かで何度も刺された、また抉られた形跡がある。

右手にはアキラの体から切り抜かれた臓器が握られていた。

「月村君。この人、『殺された』のね」

背後で、嗚咽を漏らしている沙流歌ちゃんを慰めていた梨守さんが、唐突に言い放つた。

“殺された”。

つまり、アキラを殺した殺人者がこの建物に“いる”と、梨守さんは主張している。

確かに、自殺と考えると到底ありえない死に方だ。

それにアキラには自殺をする気配なんて、微塵も感じなかつた。

考えたくないのだが、そういう事になつてしまつ。

梨守さんが近づいて、死体となつたアキラを間近で調べる。

「傷跡から見て……多分、ナイフか何かで刺されたんじゃないかな

「…………だろうね」

「それにしても……悪趣味な殺し方だわ。臓器を右手に握らせて、発見した人を恐怖に陥れようと考へていてるなんてね」

梨守さんはアキラの右手に握られていた臓器を皿にして、顔を歪ませた。

そして、開いていた皿を瞑らせると、梨守さんはトイレの周りを調べ始めた。

僕はやりきれない気持ちでまだアキラの傍についていた。

ふと、僕はアキラの左手の方に注目する。

握られた左手からは、何かがはみ出していた。……どうやら、一枚の手紙みた이다。

僕はその握られていた手紙をアキラの手から、引っ張つてみた。

そして、クシャクシャになつていていたその手紙を広げて、誰にも悟られぬよう、僕は読んでみる。

『 よつゝん。』

私はライターと申します。

以後、よろしくお願ひします。

この紙を見つけたといつ事は、既に幕が開いた、といつ事になります。

どうでしたか？ 私が提供したこの殺戮シヨーは十分楽しんで頂けましたか？』

…… も、殺戮シヨーだと！？

怒りに沸騰しながらも、手紙に書かれた文の続きを読んでみる。

『 さて、いきなりで悪いのですが……。

あなた方には私が用意したゲームに参加してもらいます』

ゲーム？ ゲームって一体……？

『 実に簡単なゲームです。

あなた方が私に勝利したなら、ここから無事に出てあげましょ

う。

ゲームの内容は殺人犯を探し出すこと。

どうですか？ 実に簡単なゲームでしょう。
この建物にはあなた方、5人しかいません。

“ これは本当です ”。

“ 6人目がいる ” 等、甘い事は考えないでください。
犯人はあなた方5人に絞られる事になります。

あなた方の勝利条件は “ 私を見つけること ”

最後まで、見つけられない場合は自動的に私の勝ちとさせていた
だきます。

考えてください。そして、私を探し当てるください。

“ 私はあなた方のすぐ近くに潜んでいますよ ”

バカにした手紙内容だった。

あまりにも内容がふざけている。

これが本当だとしたら、僕達4人の中に “ 犯人がいる ” 事になつて
しまう。

もし、僕達4人の中に “ 犯人がいる ” としたら、アキラを殺した際
はどう説明すればいいのだ。

あの時、 “ アキラを除いた僕達4人は一つの部屋に集まっていた ”
のだ。

現実的に考えて、アキラを殺す事ができたとは考えられない。

そう、 “ 絶対に不可能なのだ ” 。

「どうしたの？ 月村君。……なんだか、顔が真っ青になっているわよ？」

僕の様子に異変を感じたのか、梨守さんが話しかけてくる。

「いや、……な、なんでもないよ」

僕は持っていた手紙を後ろに隠して、答えた。

今、この手紙を皆さん見せても、不安を煽るだけになってしまつ。この手紙は他の皆さんに見せるべきではない。

「どうあえず、さつきの部屋に戻りましょ。皆で一つの部屋に集まつていれば、安全だわ」

梨守さんの提案に、僕も賛成する。

全員で一つの場所に集まつていれば、まず、襲われる心配はないだろ？

「沙流歌、行こう……」

梨守さんが沙流歌ちゃんの肩を押しながら、トイレから出て行く。

沙流歌ちゃんは以前、泣いていた。

あんなものを見てしまえば、泣きたくなる気持ちはわからないでもない。

僕も人の死体を直接、生で見たのは初めてなのだから。梨守さん達に続いて、僕もトイレから出て行く。

「……ねえ」

トイレから、少し遅れて出てきた富野さんが、前の二人に聞こえないよに、僕へ話しかけてきた。

「な、なに？ 富野さん」

「…………やつを、何隠したの？」

「え……？」

富野さんから発せられたその驚きの言葉に、僕の心臓の鼓動が早まつていく。

「あ、やっぱ、見られていたのか……？」

ドクン！ ドクン！

額から流れ出る、嫌な汗を拭く事を我慢して、僕は口を開いた。

「えっと……、『めん。何の事かな？』

「…………いえ、やっぱり何でもないわ。気にしないで」

富野さんは田を細めて、僕を見つめると、先に廊下を歩いていった。

富野さんのあの言葉を聞いて、僕は改めて、彼女達にこの手紙を見せるべきなのだろうか、迷ってしまった。

ただ、本当にこの手紙に書かれた内容が全て正しいなら、僕はどうすればいいのだろうか？

そんな事はありえない。ありえないけれども……

もし、本当にこの手紙に書かれた事が嘘じゃないなら……。

アキラを殺した犯人は、“僕達の中”にいる。

「これでよしやく、舞台は整いました。

これからが本当のゲームの始まりです。

第一幕のベルがもうじき鳴り始めるでしょう。

次はあなたの番ですよ。

どうか思つ存分、仲間を疑いながら、私を探し当ってください。

そして、私を楽しませてください。

……あ、そうそう。言い忘れた事がありました。

私は“嘘をつく”のが大好きでしてね。

私が言つ言葉には所々、嘘が混じつているかもしれません。

あなたは誰の、どの言葉が嘘なのか、見破る事ができますか？

疑惑の手紙（前書き）

もうすぐです。

もうすぐ、第一ゲームの幕が上がります。

さて、あなた方はこの猟奇的な殺人者が誰だかわかりましたか？

この時点でわかつた方は、これ以上の犠牲者を増やさないためにも、どうかお引取りを……。

そして、犯人が誰だか、わからない方。

おめでとうございます。

あなた方にはまだまだ、このゲームを楽しんでもらいいます。

次の幕では、狂気に満ち溢れた部屋でじょ覧になるでしょう。

血の海で覆いつぶされた“女性の死体”を。

ズタズタに引き裂かれた四肢。

もぎ取られた四肢の痕からは大量の鮮血が見られる事でしょう。

それでは、どうかごめんなさい、お楽しみください。

私達はさつきまでいた部屋に全員で集まつた。
無音、殺風景な部屋のせいか、ここが現実とはどこか遠くに離れて
しまつたように思わせられる。

全員の顔色には恐怖、不安、疲れが浮かび上がつていた。

無理もない。

あんな事が起きた後なのだ。

平然としていられる方がおかしいだらう。

大城さんを見てみる。

余程のショックだつたのだらう。

目が赤く腫れる程泣いて、今も梨守さんに慰められていた。
梨守さんはさつきの出来事でショックを受けたものの、もう立ち直
つている様子だ。

地面に座つている月村君は、さつきから考え方をしているかのよう
に、俯いて誰とも話そつとする素振りがない。

さつき、詳しく問い合わせなかつたが、彼の手には、手紙のような物
”を持つていた。

多分、トイレにいた時に殺された白木君の左手から、取つたものだ
らう。

何が書かれていたのかはわからない。だが、月村君は何故、隠し
たのだろうか？

彼にとつて、見られてはまずいものだつたのだらうか？

わからない。

わからない事が多すぎる。

大体、何故私達はこのような閉鎖された建物に閉じ込められてしまったのだろうか？

私達を誘拐した犯人は、お金が目的なのか？
でも、お金が目的なら、犯人の姿が見当たらないのは不自然すぎる。
なら、犯人の目的は何なのだろうか？
私達を皆殺しにするつもりなのだろうか？

……いや、それはありえない。

そもそも、私達5人は何も接点がないはずだ。
月村君を再度、見る。

もしかしたら、彼の手紙には何か重要な事が書かれているのではな
いだろうか？

私は彼の方に向かい、言葉を掛けた。

「……月村君」

「え……？ ああ、どうしたの？ 富野さん」

やはり、何か考えていたのだろう。

思いつめたような顔つきで私に振り向く。

「……あなた、やっぱり、たつき何か持っていたでしょ？」

「…………」

月村君は何も答えずに、黙ってしまう。
余程、見せたくないものなのだろうか？

「…………一体、何を隠したの？ 私には何か、『紙のよつ』見えた
けど？」

私の言葉に大城さんと梨守さんが月村君に視線を向ける。

「それって本当なの？ 阪野さん」

梨守さんは月村君を見つめながら、確認していく。

「…………ええ、私は“見たわ”」

梨守さんが無音の部屋の中、歩く音を立てながら、月村君の傍に近づいていく。

「月村君、何が書いてあつたの？」

梨守さんが問いただすように、月村君に話しかける。
だが、彼は黙つたまま、何も答えずにいた。

「何か重大な事が書いてあつたんじょ？ ……見せて！」

今まで冷静だつた梨守さんが怒鳴るように、大声で言つ。
後ろにいた大城さんはその光景を密かに見守つていた。

「……“見たら、きっと後悔すると思つ”」

よつやく、月村君から出た言葉はその一言だった。
どうこう意味なのだろうか？

私がそれを聞いたとした時、先に梨守さんの口が動いた。

「それはどうこう意味なの？」

彼女も私と同じ疑問を持つていた。

「君たちも読んだり、……わかるよ」

そう言って、月村君は梨守さんに手紙を渡した。

梨守さんが手紙を読み始める。

私と大城さんは、彼女が読む手紙を静かに聞いた。

『ようじ』。

私はライターと申します。

以後、よろしくお願ひします。

この紙を見つけたといつ事は、既に幕が開いた、といつ事になります。

どうでしたか？ 私が提供したこの殺戮ショーは十分楽しんで頂けましたか？

さて、いきなりで悪いのですが……。

あなた方には私が用意したゲームに参加してもらいます。

実際に簡単なゲームです。
あなた方が私に勝利したなら、ここから無事に出してあげましょう。

ゲームの内容は殺人犯を探し出すこと。
どうですか？ 実に簡単なゲームでしょう。
この建物にはあなた方、5人しかいません。

“これは本当です”。

“6人目がいる”等とは、甘い事は考えないでください。

犯人はあなた方5人に絞られる事になります。
あなた方の勝利条件は“私を見つけること”
最後まで、見つけられない場合は自動的に私の勝ちとさせていた
だきます。

考えてください。そして、私を探し当ててください。

“私はあなた方のすぐ近くに潜んでいますよ”。

月村君以外の全員が、ハッと息を飲み込んだ。

“私達の中に白木君を殺した犯人がいる”。

手紙の内容を信じれば、こういう事になる。だが、すぐに疑問が生じてしまつ。

果たして、本当にそつなのか？

あの時、白木君以外の全員がこの部屋にいたのだ。それはその場にいた全員が覚えている。白木君を殺す事は絶対に不可能なのだ。

“6人目がいないかぎり……”。

この手紙には、はつきりと“5人しかいません”と書かれているが、本当にそうなのだろうか？

まだ、この建物内で確認していない場所は数箇所、残っている。この手紙が嘘だとしたら、6人目……すなわち、犯人がどこかに潜んでいるのかもしね。私は送り主の名前を思い返す。

“ライア－”。

“ライア－”とは英語で“嘘”という意味だ。

これが偽名なのは明らかなのだが、どうしてこんな意味の言葉を使

つたのだろうか？

時間がどんどんと過ぎていく中、梨守さんが口を開く。

「「」の建物の中、まだ調べてない場所つてあるのよね？」

「あ、ああ。まだ、西の廊下の方は調べてないはずだ」

月村君がコクンと頷く。

「一応、全部調べておいた方がいいわね」

「やうだな。びひすぬ。全員で行つたほうが安全だとせ思つんだ
けど……」

月村君の言つた事は正論だ。

今、一手に分担すると危険な目に会う確率は上昇する。

最悪の事態を考えると犠牲者がまた一人、増えるかもしれない。

そう、『「」の中に犯人がいるのなら……』。

梨守さんも大城さんもその言葉に納得する。

こうして、意見がまとまつた私達は早速、西の廊下へと向かつた。
一刻も早く、こんな場所から出たい。

多分、今この場にいる全員がそう思いながら、月村君が西の廊下に
繋がるドアを開けた。

赤に染まる鐘

白木君が殺された東の廊下に比べて、西の廊下は明かりもちゃんと点いていて、僅かながら、皆の恐怖を少し和らげてくれた。しかし、廊下自体は荒れ果てており、所々に何か様々な破片が散らばっていた。

明かりでよく見えるせいか、かえって不気味さが増したような感じがする。

「嘘、周りには氣をつけて」

月村君の声に全員が頷いて、辺りに氣を配りながら、進む。

西の廊下には三つのドアがあった。

それぞれのドアには、黄金のエンブレムが飾られている。端から順に、「赤い鐘」、「人の吊るされた十字架」、「三田円」に並んでいた。

「どうする？ どこのから入るか？」

「もうね……。この“鐘”的エンブレムが入ったドアから開けてみましょ、うよ」

梨守さんがドアノブを手に取り、軽く回した。

錆びた音と同時にドアが開き、部屋の中が見えた。

中は電気が点いてなく、どんな部屋なのか分からなかつた。

ただ、非常に怪しげな雰囲気を出している事は間違ひなかつた。

「ええからじゃ、何もわからないわね。中に入らないと……」

そう言つて、真っ先に梨守さんが部屋の中に入つた。

「う、梨守さん！ そんなに急いで入つたら危ないって！」

月村君が注意しながら、後に続く。

私と大城さんは部屋の外から、探索する一人を見守つていた。

……なんだか、嫌な予感がする。

ふいに、私はそう思つてしまつた。

まるで、全身を悪寒が駆け巡り、怖気が走つた時のような感覚だ。私は何か不吉な事が起こるのではないかと心配した。改めて、ドアのエンブレムを見てみる。

この部屋のエンブレムは「鐘」。

このエンブレムには、何か深い意味があるのだろうか？

「月村君、こっちー！」

梨守さんが何かを見つけたかのように、月村君を呼び寄せる。月村君は急いで、梨守さんの所へと向かつた。

「どうしたんだ？ 何か見つけたのか？」

「ええ。……これを」

梨守さんが月村君に“何か”を渡した。

部屋内が真っ暗の中、それが一体何なのか、ここからでは確認できない。
何か、重大な物でも見つけたのだろうか？

「な、何か脱出する物でも見つけたん？」

大城さんは月村君に渡した物が何なのか、気になり、一人の元に行こうと、部屋内に入る。

力チャツ！

どこかでスイッチが入るような音が聞こえた。

……今の音は？

他の皆は何も聞いていないかのように、まったく気づいていない様子だ。

しかし、私は確かに何か、スイッチが入る音を聞き取った。

ズゴゴゴゴゴッ！

突如、勢いのある音が部屋の中から聞こえてきた。

「な、何や？」
「一体、何の音や？」

大成功が効率的に計上される。

後ろの一人も事態が飲み込めてない様子で、何が起こっているのか、さっぱりわからないようだつた。

だが、私はこの時、感じ取っていた。

間違ひなく、この部屋は……危険だ！

「…………早矢の部屋から出でて、早矢……。」

普段の私からは想像もない大きな声で、そう叫んでいた。

「レーベル」

大城さんがすぐに部屋の外へと引き返す。

月村君と梨守さんも、身に迫る危険を察知して、私の言葉通り、ドアの外へと向かつて走つた。

ズゴーバーバーバーバーバーバーバーヴッ！

さつきから、聞こえてくる音がだんだんと大きくなつてきていった。この音はまるで、上から何か大きな物が落ちてくるような、そんな音だった。

……落ちる？

ドアのエンブレムは「赤い鐘」の模様だった。どうして、エンブレムに模様が彫られていたのかは謎だった。だが、これはもしかすると……。

「赤い鐘」の表現は、血に染まつた鐘ではないだらうか？ なら、そう考へると、この音は落下する鐘の音にとれてしまつ。

……それじゃあ……！

私が感じ取つていた嫌な予感が、今、まさに現実へと変わつてしまつた。

「急いで！ 真夜、月村君！」

大城さんが悲痛な声で二人の名前を叫んでいた。迫り落ちてくる音は更に大きくなつていた。月村君が息を切らして、先に部屋の外に出る。

「り、梨守さん！ 早く！」

梨守さんは私達の方を目指して、走つていた。その額からは、冷や汗が流れている。

……後、一步。

顔がもう外に出て、後一步あれば、完全に部屋から出る事ができる。梨守さんが安堵の笑みを浮かべて、外へ出る一步を踏み出そうとした。

だが、その瞬間。

それは落ちた。

ズダンッ！

地面に落ちてきた轟音と共に、黄金の鉛がドアを遮った。

そして、ドアからみ出していた腕、それに片足が地面に落ち、梨

守さんの顔が宙を舞つた。

それぞれ、切断された部分から大量の鮮血がブショーツ、と勢いよく飛び散る。

腕は肘から切断され、指先が今もピクピクと痙攣していた。足は膝の辺りまで、こう、……ストンと、切り落とされていた。切り落とされた梨守さんの顔が地面に転がり落ちる。止めと言わんばかりに、転がり落ちた顔が私達の方向へと向く。首から下がない状態……なのに、梨守さんの顔は安堵して、微笑んでいた。

そのギャップがまた、私達の恐怖を更に増大させた。

月村君と大城さんの悲鳴が同時に重なる。

黄金の鉛にまべつとつと、梨守さんの血がついていた。

血がゆづくつと鉛を吹いて、床にポトッ、ポトッ、と流れ落ひる。地面の隙間からも、大量の血が流れ出て、床が流血で埋め尽くされる。

「……ぐうえ、ああ……つう、……げえ……」

私は猛烈な吐き気で襲われた。

「ううぐうえ……げえ……ぜえ……」

口に手を当てるが、抑え切れなくなり、思わず床に吐いてしまつ。予感は見事に的中してしまつた。

それも、最悪の形で、最悪の死に方で犠牲者を増やしてしまつた。

「あ、ああ……り、梨守さん……う、うげええ、ふえ……」

いへり吐いても、吐き気が止まらない。むしり、増すばかりだった。

梨守さんの田が私を見つめている。

首から、タランと脈を垂らしながら、骨の辺りまで、丸見えの状態になつていた。

その光景は、後今まで続きそうな、田に焼き付くほどの酷すぎるものだった。

白木君の時は、まだ体がちゃんと残つたままだつたので、まだ、マシ……だった。

だが、これは……、あまりにも無惨すぎる。

惨殺、グロテスク等、それだけの言葉では、とてもこの光景は表現できたものではない。

大城さんが座り込んで、嗚咽を漏らしながら、泣き叫ぶ。

「…………梨守さんまで、死んでしまった、…………」

月村君は悔しがるよに何度も何度も地面を叩いた。手が真っ赤になつても、なお、それを止めなかつた。

大城さんの言葉に私と大城さんが振り向く。

大城さんの顔には飛び散った際にについたのだろう、梨守さんの血がこびり付いていた。

ち
て
い
た

大城君が私達を見ながら、泣き叫んで、話し出す。

「だつて…… そうやう！？」これで一人田やで……！　白木も殺され
て、今度は真夜まで

……！ ウチ等、もう終わりや……、ソレで死ぬんや……」

パシンツ！

その言葉にカツとなつて、私は大城さんの頬を夢中で引っ叩いた。

「う……！ あんた、何すんね……！」

「……そんな事……言わないで。簡単に……あきらめないで……」

「な、なら……！ 何か考えがあるんか……！ 言つてみてや……！」

私は黙り込んだ。

……考えなんてあるはずがなかつた。

私も大城さんと同じく、絶望に叩き込まれていたのだ。
それでも、諦めたくない。
生きる事を諦めたくない。

「と、とにかく……わざの場所へ……。僕は……これ以上、ここに居たくない」

月村君がはつきりと、自分の意思を告げる。

「……同感、だわ」

私ももう、これ以上、ここには居たくなかった。

これ以上、居続けたら、きっと、精神が壊れてしまう。

「沙流歌ちゃん、戻る?……」

月村君が、崩れていた大城さんを起こし上げる。
ボロボロに泣き崩れていた大城さんは、まるで、壊れた人形のよう
に見えてしまった。

自分で動く事さえできない。そんな哀れな人形みたいに……。

終幕へ…（前書き）

さて、これで第一の幕が終わりました。

次は終幕への鎮魂歌です。

皆様は、誰が犯人なのかわかりましたか？

まだ、わからない方。

もう一度、言いましょう。

“ この中に、嘘をついている人がいます ”

いえ、 “ 嘘が書かれている ” と言った方が皆様にはわかりやすいでしょう。

犯人はあなたの方のすぐ近くにいるのだから……。

あなた方は考えるだけ。

あなた方はこの終焉を見届けるだけ。

そして、あなた方がもし、犯人をわかつたとしても、それは “ どうする事もできないのです ”

私達はまた、さつきの広間へと戻っていた。
白木君に引き続き、梨守さんまでも殺された。
もう誰が犯人なのか、どうでもよかつた。

ただ、自分が殺されないのなら……。

私はやりきれない顔で天井を見上げた。
窓ガラスも何もない。

真つ暗な壁紙の中、明かりが点いているだけ。
もう、この屋敷から出る事はできないのだろうか?
月村君も大城さんも疲れ果てた顔で上の空を向いていた。

刻、一刻と時間は過ぎていく……。

突如、大城さんが何か決心したかのように、立ち上がった。
そして、何処かへ行こうと、扉の方へと歩き向かう。

「大城さん、どこに行くつもりなんだ?」

月村君の問いかけに大城さんは黙つて、歩き続ける。

「おい! 沙流歌ちゃん! どこに行くなら、皆で ー」

「……ホンマに階で行つた方が安全なん?」

大城さんが目を細めて、月村君を睨み付けた。

「どひいづ意味だ?」

「ウチは……もひ、あんたらの事、信用できへん。……一人の方が安全かなあ、つて思つてる」

「…………」

月村君も、大城さんの言葉にどひが同じ気持ちを抱いていたのか、引き止める事ができなかつた。

「いめんな、月村君、富野さん。ホンマにいじめんな…………」

そう言い残して、大城さんは白木君が殺された部屋のある廊下の扉を開けた。

それを黙つて、見つめる私達。

大城さんが広間から出て行つた後、月村君が苦々しい顔で私に話しかけてきた。

「富野さん、ごめん。僕も」

「……仕方……ないわ」

彼が言いたい事はわかつていた。

私だつて、大城さんと同じ気持ちだつたのだ。
彼もまた、一人の方が安全だと踏んでいた。

「……すまない」

月村君はやるせない顔でそう呟いた。

私は、それに頷き、黙つて彼を見送る。

月村君は梨守さんが殺された部屋へと向かつていつた。
そして、扉を開けて、また一人、広間から立ち去つていつた。

……とうとう、この場所は私一人だけとなつた。

一人ぼっちの広間は、静寂で、何も起こらない。
ただ、……無意味な時間が過ぎていくだけ。

梨守さんが死ぬ寸前の事を思い出す。

梨守さんは死ぬ寸前、月村君に“何か”を渡していた。

それが何なのか、あの時、部屋が暗かつたので分からなかつたが……。

あれは一体何だつたのだろうか？

もしかしたら、何か重要な物だつたのだろうか？

いや……だが、もう遅い。

梨守さんから、その“何か”を渡された彼も、もう部屋の向こうに
行つてしまつた。

それに、彼がもし犯人だつたのなら、それこそ、危ない。

危険を冒してまで、聞きに行く事ではない。

……そうだ。

誰も信用せず、誰の言う事も聞かず、誰の見た事も信じない。自分だけを信じればいい。

“私は殺人鬼ではない”

それだけを信じていればよかつたのだ。
他人を信じて、それで疑心暗鬼になつた今、私達には初めから、
勝利する事”なんて不可能だつたのだ。

“

そして、また、時間が過ぎていく。

あれから、いくら時間が経つたのだろうか。

依然、何も起こりはしない。

月村君や大城さんも、二度と、この広間には姿を現さなかつた。

私は精神的にも、肉体的にも、限界まで追い詰められていた。もはや、彼等がどうなったのか、わからない。彼等も私と同じで、今も孤独の中、何んでいるのだろうか。

私は立ち上がった。

ゆっくりと、ゆっくりと、大城さんが向かった方へと歩いていく。

私は血迷つてしまつたのだろうか？

さつき、「自分だけを信じればよかつた」と後悔したのに……。なのに、こうしてまた、他人に頼ろうとする。私は人との馴れ合いが好きじやなかつた。

……ハズだつた。

だが、人は不安に陥ると、いつも他人に頼つてしまつ。人間というのは脆い生き物だ。現に、今の私を見ればわかる。体を震わせながら、「一人は嫌だと……」、他人に助けを求めているのだから。

ドアノブにそつと、手を置く。

ギシギシとした音を立てながら、ゆっくりと、ドアを開けた。

薄気味悪い廊下が続いている。

暗く、明かりが途切れているせいだろう。

それにこの先の男子トイレで白木君が殺されたのだ。

そう感じてしまうのは、無理もない事だつた。

私は首を立てずに恐る恐る、歩いていく。

廊下には大城さんの姿は見えなかつた。

この廊下には先に男女のトイレだけしかない。

なら、トイレにいるのだろうか？

私は女子トイレの方へと向かい、歩いていく。

隣の男子トイレには白木君が今も、死体となつて、地面に倒れているだろう。

その光景は今も頭から離れる事はなかつた。

女子トイレを覗いてみる。

明かりが点いて、水滴が落ちる音が聞こえていた。

「……誰もいない」

女子トイレには誰の姿もなく、私一人が手洗い場の鏡に映つていた。
便所内に大城さんがいなかつた、一つずつ、ドアをノックしていく。

「ン、ン……。

全てのドアにノックをした。

だが、大城さんからの反応はない。

私は全てのドアを開けていくことにした。

一つ、一つとドアが開いていく。

だが、どの便所にも鍵が掛かっていなく、中には誰もいなかつた。

とうとう、最後の便所のドアへと手を掛けた。

本当に彼女はこのトイレ内にいるのだろうか？

いや、いたとして……、果たして、生きているのだろうか？

白木君が殺されていた事と重ねてしまつ。

だが、答えは開けてみなくてはわからないのだ。
手の震えを押さえて、ドアを強く押した。

「.....」

……最後の便所も誰もいなかつた。

全ての女子トイレのドアが開いている。
だが、私以外の誰の姿も見えない。

なら、大城さんは一体、どこに行つたのだろうか？

その時、嫌な事が頭を過ぎつた。

……男子トイレはまだ、確かめていない。

もしかしたら……、大城さんは……。

私は女子トイレから出た。

そして、男子トイレへと入つていく。

月村君がスイッチを入れっぱなしにしていたので、明かりは点いていた。

一步、一步。

緊張しながら、足を運ばせる。

頭に浮かぶ、嫌な想像をかき消しながら……。
死体となつた白木君は依然、床に横たわっていた。

……“左手”に臓器を握り締めながら。

「……え？」

私は目を疑いながら、彼の左手を見つめた。

……ちょっと、まで。

どういう事なのだ……。

確か、白木君は“右手”に臓器を握り締めていたはずだ。
うる覚えだが、私は確かにそれを見ていた。

……それなのに、左手に変えられている。

「……これ……は」

臓器が握られていたはずの右手の方を見る。

「……あ……つ」

右手には紙が握られていた。

それに気づいた私は、すぐに彼の手から紙を奪い取る。

紙は四重に折りたたまれていた。

すぐにその紙を折り返してみる。

文字がだんだんと見えてきた。

全部折り返した後、私はすぐにその文字が書かれている紙を読んでみた。

『どうですか？ 皆様。

この殺人ゲームの犯人はもう誰だかわかりましたか？

そろそろ、舞台も幕を下ろそうとしています。

これが本当に最後の言葉です。

あなたは、このゲームの殺人犯が誰だかわかりましたか？
わからなければ、あなたの負けとみなし、誰一人この建物から生きては帰れないでしょう。

さて……、忠告は終わりました。

気づいていると思いますが、彼の臓器は右手から、左手に変えさせてもらいました。

“新しい、新鮮な臓器です”。

よく、『見』になつてください。

そして、この部屋の天井を見てください。

私は、あなた方の恐怖を浮かばせる顔を見るたびに、心が『安らぐ』のです。

これで、私からの手紙は終了とおもつてもらっています。

では、死後の世界で、また会いましょう……』

手紙に書かれていた通りに、よく目を凝らしながら、臓器を見てみる。

白木君から出ていた血は、少し色が黒くなっていた。だが、臓器から流れる血はまだ、真紅のように赤い。

真新しい、鮮血だ。

ピタッ！

上方から、一滴の水が私の頬に落ちてくる。それを手で拭うと、手が真っ赤に変わつていった。

「…………え…………？」

手紙に書かれた通りに、目をゆっくりと、上へと向けていく。

「あ…………あ…………っ」

手が、足が、体の全てが震えだす。

そこには……。

天井に張り付けられ、お腹をズバッと、切り裂かれていた、大城さんの姿があった。

肉裂いて

…へひせ

あと、一人！！！！

今回も終わり！！！！

死ね死ね死ね！

ひひひひひ、いつひひひひつひひひひひ！――！

11

『殺人鬼からの最後のメッセージ』

፳፻፲፭

そして、やがてなが。

あなた達の負けです。

「J-Jまで来たのなら、あなた達の負けは決定です。」

恐怖に引きつる素顔を見せてください。

私は、それだけを望みます。

それでは、死後の世界で会いましょう。

僕は宮野さん達と別れた後、あの三つのドアがある廊下で静かに佇んでいた。

廊下には、梨守さんの四肢がバラバラとなつて散らばっていた。当然、顔も切断されていたので、廊下に転がっていた。

梨守さんの目は虚ろとなつて、僕を見ていた。

まるで、恐怖を訴えているかのようにただ、僕をずっと見ていた。僕は近寄り、梨守さんの開いたままの目を手で重ねて、閉ざした。

……これ以上、彼女の無残な姿を見ていたくなかった。

彼女の散らばった四肢を集めて、廊下の向い側へと置き去りにした。

そして、最初の「鐘」のドアの前に座り込んだ。びっしりと、大量にプリントを挟み込んだファイルを見る。梨守さんが殺される前に、彼女から受け取つたものだ。

「……梨守さん」

彼女の姿を頭に思い浮かべて、目が熱くなつた。それを探しながら、ファイルをゆっくり捲つていく。

ファイルを捲っていく内に、ある重大な事がわかつた。

この殺人ゲームは、今回だけではなく、過去に何度も行われていた事。

その度に、全員が死亡している事など……。

僕は夢中になつて、次々とページを捲つていった。

「……シ！」

思わず、息を飲み込んでしまう。

その捲つたページには、今まで殺してきた人の死体の写真と死亡要因が、大量の文字と一緒に紙に記されていた。

>肝臓剥き出し<、>頭部串刺し<、>四肢切断<。

惨殺な殺し方が、たくさん書かれている。
本当に人間なのか、と疑つてしまつくらいにとても惨たらしい。

最後のページを捲ると、僕達の事が書かれていた。

> NO.51 白木 アキラ <

ライナーに踊らされて、死体を偽装する。

だがその後、腹部を何度も刺されて、死亡。

その後、ライナーに臓器を抉られて、死亡者の右手に持たせる。

「こんなクズは死んで当然。イヒヒヒヒッ！」

死体を偽装……？ それに、アキラはあの時、“左手”に臓器を持つていたはずだが……。

そこには、一番最初に殺されたアキラの殺人方法が、異なつて書かれていた。

一体、どういう事なのだろうか。

アキラはあの時、死んでいなかつたとでも言つのだろうか。
分からぬ。

今は確かめる術がない。

「……アキラ」

最後のかぎカツコに書かれた殺人者の言葉が、なんとも腹立たしく、同時に恐怖が込みあがつてくる。

人を殺して、どうしてこんな言葉が書けるのだろうか……。

アキラのすぐ下に書かれていた、次の項目を見る。

> NO.52 月村 優 <

「鐘」の部屋を空けてそのまま下敷きになり、死亡。四肢が廊下に飛び散り、残った者達に恐怖を与える。血は廊下にじろじろ流れ、恐怖の顔を浮かべるよ。第一のゲームは幕を閉じたよ。これで残りは3人……」

「そ……んなつ！」

このファイルが正しいならば、本来なら第一の殺人は梨守さんではなく、僕が死んでいたという事になる。

「梨……守……さん……！」

胃がキリキリと締め付けられるようになり、痛くなる。
目が熱い。頭が少し濡れてしまう。

……梨守さんは、僕のせいで死んでしまったのか。

どうしようもない罪悪感が心の底から、湧き上がってくる。
それを、グッと押さえながら、次の項目を見た。

> NO.53 大城 沙流歌 <

腹部を切り裂かれて、死亡。

体内の臓器を全て剥ぎ取られて、トイレに捨てる。

「死んで同然。だつて、うざかったんだもの」

「大城さん……」

今更だが、彼女を一人で行かせてしまった事を後悔した。
この事が書かれているという事は、彼女はいざれ殺されてしまう。

……だが、今更この事を言つても、どうなるのだらうか？

大城さんだつて、どうせ僕の事を信じてはくれないだらう。いや、こんな重要なファイルを持つてゐる僕を犯人と疑うかもしない。

最後の項目を見てみる。

そこには衝撃的な事が書かれていた。

>NO.54 梨守 真夜 <

ライターの正体を暴く。

今までのゲームで唯一の生還者となるだらう。

「残念。これでゲームのおしまい」

“「」のゲームのおしまい”。

すなわち、脱出方法なのだろうか。

梨守さんを生かしておけば、彼女だけでも助かつた。

最後の項目にはそう書かれている。

「え……最後？」

僕は目を大きく揺らしながら、もう一度、今回の殺人ゲームのファイルを捲った。

だが、何度も探しても、最後の一人の名前がファイルには書かれていなかった。

「富野 美影」の名前が……！

それでは……、それでは、犯人は！？

「……もう、わかつてしまつたのね」

扉の開けた音が聞こえると同時に背後から、ファイルに名前が記されていなかつた者の声が聞こえてくる。

振り向くと、その手には血に染まつた包丁が握り締められていた。

「本当はあなたが死んでいたのよ。そのファイルに書かれていたとおりにね」

「君が……君が殺したのか？！」

僕の質問に薄気味悪い笑みを交わして、答える。

「ええ、そうよ」

殺人鬼は包丁にこびり付いた血を薈め回しながら、僕に一歩ずつ迫つてきた。

「どうして、どうしてこんな事を…」

後退しながら、殺人鬼に問いかける。
手に汗を握り締め、後退する僕の姿を見て、殺人鬼は狂ったように笑いながら答える。

「どうしてって……楽しいからに決まっているでしょ？」

当然のように、殺人鬼は僕に言い放つた。
さつきまで、共に行動をしていた時とはまるつきり違う顔で。
その目に狂氣を宿しながら、包丁をこちらに向けてくる。

「大城さんは！？ 彼女ももう殺したのか？」

「そうよ。呆氣なく死んじゃったわ。助けてー、助けてー……つて、馬鹿みたいにひたすら叫んでいたわ。……うるさかったから、一突きで殺しちゃった」

「く、狂ってる……！」

後退するも背中が壁に当たって、これ以上はもう進めない。足がガクガクと震え始め、立っている事もできずに地面に座ってしまう。

その僕の様子を見て、発狂しながら笑う殺人鬼。

だんだんと殺人鬼が近づいてくるにつれて、僕の心拍数が上がった。これは恐怖の鼓動。バクン、バクンと胸打つ心音が、はっきりと聞こえてくる。もう、まともな呼吸ができなかつたため、息を荒げた。

殺人鬼は、もうすぐここまで迫つてゐる！

「はあ……はあ……く、来るな！　来ないでくれ！」

僕の声も届かず、殺人鬼は包丁を振り上げた。

「……あ……ああ……やめろ……やめてくれえええつ……！」

ありつたけ振り絞つた声で、僕は叫んだ。

包丁は振り上げたまま、殺人鬼は口元に笑みを浮かべている。

そして、ゆうべと静かに口づけた。

そう、僕達に見せた事のない最高の笑顔を浮かべて。

「……だめ」

グチヤツ！

あるニュースより

「先日、4人の少年少女が遺体が 市 区の廃棄工場から、発見されました。警察によると、4人はまったく何の関係もなく、犯人の無差別犯行ではないかと、考えております。なお、似たような事件が先週から起こっており、これで5件目になります。警察側はこれを集団グループによる犯行ではないかと、今後も調査を調べていく模様です。えー、次のニュースは……」

あなた方を、心行くまで楽しませてあげましょう。

私は歓迎します。

ほら、あなたも田観めれば……。

そこはまつたく知らない空間。

「死と疑心の部屋へようこそ」

『笑顔』（後書き）

作者の桃月です！

このたびは最後まで読んでいただき、ありがとうございます！

では、早速ですが、ネタバレを…！

この作品の「嘘」というのは『最初は「グチャツ』』での前書きに書かれた事です。

これは犯人である美影の言葉であり、「私は“嘘”はつきません」というのがまるつきり、嘘という事なります。

つまり、美影視点で描かれた言葉はほとんどが嘘となります。
(もちろん、実際には死にましたが…)

美影視点に変えたのは、犯人が誰なのかわからなくなるため、と上に記載した事の二つです。

まあ、ぶっちゃけた話を犯人の嘘の言葉で話を進めていくという…
…（まあ、無茶はありましたが。

「美影は精神が狂っています」

白木殺人の件ですが、ファイルに書いてある通り、死体を偽装しています。

「踊られた」と書かれていますが、大方、美影に「梨守さんの事

を協力する」等と吹き込ませて死体偽装を協力させたと思つてください。

その後、無抵抗の白木をナイフで殺害。（あとは、沙流歌をファイルの通りにトイレで殺した後、白木をファイル通りにする。

あと、この物語の「真犯人」、読者の皆様です。

物語を読んでいく=人が次々と死ぬ

どのミステリー作品やホラー作品、サスペンス作品でも、これは殺人の定義となっています。（まあ、言つてしまつたらなんですが（汗）

前書きにも書いておりましたが、「これ以上読むな」や「引き返せる」はその事を指しております。

6話の「肉裂いて…」の内容についてですが、少々やりすぎたと思います。

不快な気分になつた方、本当にすみませんでしたm（・_・）m

はあ～。この作品を書いていて思つたことは「本当に難しい」です。こんなグロい小説を書いたのは初めて（MURDER GAMEは一応アクションですのでw）だったので、本当にリアルに書くことができなかつたと思います。

本当に申し訳ないです（汗）

次、書くときは頑張つてもつとリアルな描写が書けるよう、頑張つておきますw！

ふう～。これでやつと「僕、女になりました」を一筋で書く事ができました！（こらw

「僕なり」もよろしくお願ひします！

では、本当に今まで読んでいただき、ありがとうございました！

これからも違う小説で書いていきますので、応援よろしくお願いします！(*。^*)ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9499d/>

the Room of deat h 『真実と嘘』

2010年10月28日04時51分発行